

『医心方』における字音声点の加点的目的

加藤大鶴

【キーワード】 医心方 声点 字音 呉音 加點

○ はじめに

訓点資料の字音注記が、どのような目的で加えられたのかという問題は、未だ十分に明らかにされていない。本稿では字音注記のうち声点を対象としてこの問題を考察する。資料内での諸注記は相互に関連しており、最終的にはこの関連の中で字音注記の目的を考えていかなければならないことは言うまでもないが、本稿で扱う資料においては声点に字音注記の目的が端的に現れるのではないかと考え、調査の対象とした。

声点の機能については語の同定⁽¹⁾、字義の同定⁽²⁾、などが多くの先行研究において指摘されている。これらの機能による、声点加點が家説の伝授を目的としている場合も報告されている。本稿ではこうした先行研究をふまえ、古医書である医心方を資料として被加點字の傾向について分析する。また、この分析を通じて加點の目的を考察していく。

*本稿における実例表示の略号等について

・ t は淡色朱筆、n は濃色朱筆、これ以外は墨筆のものを示す
・ 声点は ^、v 内に示した

・ 加點位置は小書で示した。右||右傍、左||左傍、頭||欄外頭注、脚||欄外脚注

・ 「」内は出現箇所で、たとえば [01:05] は「第六卷十六丁裏五行目」を示す

1 加點の順序について

本稿で扱う『平井家旧藏医心方』（以下医心方）は、永観二年（九八四）に丹波康頼によって撰進された全三十卷の医書である。その内容は中国の古代から隋唐に至る古医書の引用から成り立つ処方集である。本文は、全三十卷のうち二十七卷と成實堂文庫所蔵の一卷（卷二十二）が平安時代の書写である。また、本文には後述の識語に対応するヲコト点、仮名などの注記が多数数存在する。

字音注記には反切・同音字注(類音字注)・仮名音注・声点がある。⁽⁵⁾ 声点は圈点であらわされ、六声体系を概ねとどめる。⁽⁶⁾ これらの字音注記は識語に示されるように天養二年(一一四五)に宇治本から移点された。本資料には大きく分けて墨筆・濃色朱筆・淡色朱筆の三種による字音注がみとめられるが、これは、あらかじめ用意された写本に対し、天養二年に宇治本から移点されたものであるとされる。⁽⁷⁾ またヲコト点・仮名点等の訓点は巻八表紙見返しの識語に記載されている内容と対応しており、宇治本の加點狀況を伝えているという。今ここに加點者と筆の色の關係を整理し、まとめると次のようになる。

一次加點 藤原行盛⁽⁹⁾ 墨仮字・墨筆(A)

朱星点・濃色朱筆(B)

二次加點 丹波重基⁽¹⁰⁾ 朱星点・淡色朱筆(C)

字音注についても、この識語と対応が認められるか分析を行う。声点の総数は、墨筆点(A) 1864例、濃色朱筆点(B) 358例、淡色朱筆点(C) 489例である。うち23例は、異なる筆で声点が重ね書きされているが(水濡れによる汚損を補うため)、全体的にほとんど重複はないと言える。

次にABCの加點の順番について検討する。検討には、声点と反切を併記した例に着目する。先行研究によれば、反切が声点や仮名音注の「典拠」となる例が指摘されている。⁽¹¹⁾ 本資料でも反切が声点の「典拠」となり得るのであれば、ABCの筆による各声点は、同筆の反切と共に起るか、加點順番が先の反切と共に起るはずである。

反切と声点の共起例の総数と組合せは以下の結果となった(声点一つに異なる二筆の反切例はのぞく)。

| | A 反切 | B 反切 | C 反切 |
|------|------|------|------|
| A 声点 | 157 | 0 | 2 |
| B 声点 | 15 | 21 | 0 |
| C 声点 | 41 | 1 | 5 |

A反切はABC声点と共に起しているが、B反切はほぼB声点と、C反切はほぼC声点と共に起している。これはA反切が最初に記載されてからA声点が加點され、その後でBC声点が加點されたことを示すものと考えられる。またB反切はB声点のみならずC声点とも現れる。これはB反切記載の後でC声点が加點されたことを示している。問題は、C反切と共に起するA声点の2例である。しかし例外となるA声点C反切併記の2例は、「悸」⁽¹²⁾ <去>_左t其季反_左tハイ[08048]、「瀝」⁽¹³⁾ <徳>_脚t力的反[09150]である(略号等は左記参照)。「悸」の反切は、併記される同筆(C)の仮名音注「ハイ」と位置が近接している。これは仮名音形を示すために記載された反切と考え、A去声点との関係性は薄いと考えてよい。「瀝」の反切は欄外脚注の形を取っており、こちらも関係性は薄い。

反切が注記される位置からも加點順番に関する傍証は得られる。次に、声点一つに異なる二筆の反切例が注記されるものを示す。

【A反切右傍/B反切左傍のもの】

「悸」<去> 右布對反_左n基季反

[0616b5]

【樺】(へ去) 右布對反左^レ其季反 [0811a1]

【椽】(へ徳t) 右中劣反左^レt陟劣反 [0924b5]

【A反切右傍/B C反切頭・脚・さらに右傍のもの】

【紐】(へ上) 右女久反右^レn女巾反 [0305b7]

【檀】(へ上) 右徒感反頭徒感反脚^レt徒感反 [0915b5]

【窄】(へ徳) 右切在各反頭^レt詐白反 右サク [10104b5]

これらを見ると、A反切が右傍、B C反切はその他の位置に注記されていることが分かる。本資料では反切・仮名音注・同音字注(類音字注)は被注字のすぐ右傍に注記されることが原則であり、右傍に訓点やその他の書入がある場合にはじめて左傍ほかの注記となる。よってA反切はB C反切に先行して記載されたものと推定できる。

こうした事實は、字音注の加点がA↓B↓Cの順であったことをくつがえすようなことはなからう。よって本資料に現れる字音点も、宇治本の加點状況をほぼ反映するものとして扱いうることが確認できよう。

二 反切が併記される声点

前節では反切と声点の組合せを筆別に概観した。次に反切下字と声点の示す声調が、全て一致しているかどうか検討する。これらの組合せにおいて、両者の声調が例外なく一致しているのなら、本資料における反切は声点に対して強制力を持った典拠であったことになる。

反切と声点の比較基準は切韻系韻書である【広韻】を用い、入

声字を除いて比較を行った。結果は以下の通りである(数字は延べ字数、「」内は【広韻】の反切と掲出形が全く同じもの)。

各筆ともに、大部分が声点反切一致例となっている。声点と反

| | A筆 | B筆 | C筆 | 合計 |
|---------|----------|---------|---------|-----------|
| 声点反切一致 | 109 [70] | 25 [11] | 38 [19] | 172 [100] |
| 声点反切不一致 | 9 [7] | 5 [2] | 6 [1] | 20 [10] |
| 字音不明等 | 4 [0] | 2 [0] | 1 [0] | 7 [0] |
| 合計 | 122 [77] | 32 [13] | 45 [20] | 199 [111] |

切の関係は、この結果を見る限り緊密である。しかし、声点と反切が一致しないものも20例含まれており、反切は声点の典拠とならない場合もあることが分かる。具体例は以下の通りである(当該字と声点・注記反切と反切下字の示す声調【広韻】反切と声調/出現文字列、の順に示した)。

【墨筆声点】

- ① [腫] (へ去)・徒旱反上声/徒旱反上声 [腫中] [0223a4]
- ② [杼] (へ去)・神與反上声/神與反上声 [大杼] [0219a2]
- ③ [浣] (へ去)・胡管反上声/胡管反上声 [浣衣] [1220b4]
- ④ [肚] (へ去)・徒古反都古 [二反去声/徒古反上声] [肚膈] [0265a8]
- ⑤ [瘦] (へ上)・所祐反去声/所祐反去声 [瘦弱] [0117a4]
- ⑥ [椎] (へ上)・直追反又槌反平去声/直追反平声 [輪椎] [0241b1]
- ⑦ [尿] (へ上)・奴弔反去声/奴弔反去声 [遺尿] [1235b7]
- ⑧ [齋] (へ平)・齊礼反上声/徂礼反上声 [齋庀] [1930b9]

⑨ 「捻」〈平〉・都念反去声／記載なし「捻」 [20189]

【濃朱筆声点】

⑩ 「件」〈去 n〉・其聲反上声／其聲反上声／「件」 [271266]

⑪ 「菌」〈去 n〉・ n 貝殞反上声／渠殞反上声／「翟菌」 [015586]

⑫ 「虻」〈去 n〉・愚袁反平声／愚袁反平声／「虻」 [162727]

⑬ 「蠺」〈平 n〉・ n 力巧反上声／盧啓反上声／「蠶蠺魚」 [016361]

⑭ 「瘀」〈去 n〉・於豫反上声／依倨反去声／「瘀血」 [162021]

【淡朱筆声点】

⑮ 「頊」〈去 t〉・右胡講反上声／胡講反上声／「頊頊」 [090285]

⑯ 「咀」〈去 t〉・左才与反上声／慈呂反上声／「咬咀」 [060563]

⑰ 「咀」〈去 t〉・右才与反上声／慈呂反上声／「咀嚼」 [120227]

⑱ 「著」〈上 t〉・左渠夷反平声／渠脂反平声／「黄著」 [1123287]

⑲ 「鏡」〈平 t〉・左戸塩反去声／士懺反去声／「鏡去」 [161561]

⑳ 「鏡」〈去 t〉・右牛園反平声／愚袁反平声／「芫花」 [090656]

① 「膾」② 「杼」③ 「浣」④ 「肚」⑩ 「件」⑪ 「菌」⑮ 「頊」

⑯ 「咀」の声点は全濁上声の去声化を反映している可能性がある。

⑤ 「瘦」⑥ 「椎」⑦ 「尿」⑧ 「薺」⑫ 「虻」⑬ 「蠺」⑭

「瘀」⑱ 「著」⑲ 「鏡」⑳ 「鏡」の声点は呉音系字音を反映した

ものか。⑨ 「捻」は「唵」の反切（都念反）と取り違えたもの

か。

右にあげた全濁上声の去声化や呉音系字音を反映したと思しき

声調は、反切という音注では明示しにくい。これらの例では反切

が記載されているにも関わらず、反切が声点の典拠として必ずし

も機能していない。

しかし全体としてみた場合、反切と声点一致数から反切が声点の典拠となっていることも見てとれる。加点者は反切に従って示すことができる字音と、示せない字音とがあることを知っていたのだろう。つまり加点者は各々の字音知識に基づき、場合にに応じた、反切に限定されない声点加点を行っていることが分かる。

三 声点を加えられた字の傾向

次に、前節で触れた加点者の字音知識がどのようなものであるか、声点加点字の傾向を通じて考察する。本稿で問題にしている加点の目的についても、加点者の字音知識の内容と密接な関係があるはずである。

加点者の有していた字音知識には、意義に対応する音、文の内容に応じた字音の引き当てや使い分け、語レベルでの音形、といったことが考えられる。本稿ではこうした推測のもとに、いくつかのケースごとに加点字の傾向性を分析することにする。

(一) 分析対象

本資料に現れる被加点字のうち、上位頻度のものを分析対象とする。これは加点頻度の高い字に、本資料における加点の傾向が現れやすいと考えるためである。

分析の対象は、三筆を区別せず頻度順に並べ、十回以上声点が加点される上位33字種とした（全1159字種中）。対象となった字は次に示すとおりである（数字は出現回数）。

黄 (33)・熱 (31)・消 (22)・中 (22)・復 (22)・脹 (21)・末 (21)・患 (19)・煩 (19)・人 (18)・満 (18)・数 (18)・適

(17)・石 (16)・參 (15)・塞 (15)・羸 (14)・大 (13)・風 (13)・悶 (13)・憤 (12)・候 (12)・腎 (12)・痛 (12)・頭 (12)・芒 (12)・逆 (11)・疸 (11)・長 (11)・防 (11)・烏 (11)・嘔 (10)・湯 (10)

(二)「広韻」と一致する字

以下、三(一)で抽出した字を「広韻」に一致するかしないかで分け(入声は便宜上「一致」とみなした)、それぞれの傾向を考察する。「広韻」に一致するグループの個別例を検討すると、次の共通性が確認できた。

- ①声点によって、声調の異なりに伴う字義の違いを示したもの
- ②漢字一字が一語に相当することを示したもの

①には、復・中・悪・数・長の5字種が該当する。以下に「広韻」記載の声調と字義を示す。

| | | | |
|------|----------|----|------|
| 復 去声 | 又也返也往来也 | 入声 | 返也重也 |
| 中 平声 | 平也成也宜也堪也 | 去声 | 當也 |
| 惡 去声 | 憎惡也 | 入声 | 不善也 |
| 数 上声 | 計也 | 去声 | 算数 |
| 長 平声 | 久也遠也常也 | 入声 | 頻数 |
| | 永也 | 上声 | 大也 |
| | | 去声 | 多也 |

またこれらの字に加点された声点は、字義を示すことが第一の機能であるために、次に示す二例のように必ずしも音読すること示さないことがある(ラロト点を平仮名に直して補った)。

「復」へ去 [1607a8] 末附子を 酢に和して塗れ上に 燥わかハ
復へ去塗ヌ上

「中」へ去 [0273a5] 中へ去経一脈た...

具体例は次の通りである(以下、出現箇所が示されていない例は加藤大鶴「二〇一bを参照」)。

・復へ去: 22字 全例(A4・B5・C13)が「又也返也往来也」に該当。

・中へ去: 22字 17字(A2・B6・C9)が「當也」に該当。

・数へ去: 19字 15字(A9・B3・C3)が「憎惡也」に該当。

・悪へ去: 19字 15字(A9・B3・C3)が「憎惡也」に該当。

*「惡」へ入、「惡語」へ入○、「醜惡」へ上入(「不善也」に該当)

・数へ入: 18字 16字(A6・B6・C5)が「頻数」に該当。
1字(A1)は呉音系字音のため除く。

・長へ上: 11字 10字(A4・B3・C3)が「大也」に該当。

*「長大息」へ平○(「久也遠也常也永也」に該当)

②には熱・末・適・候・腎の5字種が該当する。熱・候・腎は音読の名詞として解釈されており、適・末は一字漢語サ変動詞として解釈されている。

・熱へ入: 31字 16字(A9・B2・C5)が一漢字一語。

治中へ去熱へ入の霍乱ハ方 [1118b4]

・末へ入: 21字 20字(A16・B2・C2)が一漢字一語。

可末へ入桂着二ヶ舌下二漸二咽汁ハ [0327a7]

・適へ入く：17字 16字 (A12・B3・C1) が一漢字一語。

煮て取て一升半を適へ入し寒温を [1618b3]

・候へ去く：12字 全例 (A3・B1・C8) が一漢字一語。

服して石を得ル力を候へ去 [1912a9]

・腎へ上く：11字 8字 (A5・B2) が一漢字一語。

白キ 汗出でて如ル流水ノ者腎ノ絶ナリ四ノ日ニ死 [0113b1]

これらの10字種について筆ごとにABCの内訳を見ると、

「悪」「熱」「末」「適」にA点が多く「復」「候」にC点が多いといった偏りを持つ字があることは分かるが、共通した質的な傾向はない。

(三) 呉音系字音に基づく声点が加えられる字

次に、「広韻」に一致しないグループについて述べる。これらは呉音系字音を高い割合で含む(あるいは呉音系字音だけ)字種のグループである。これまでの検討で残った23字種のうち、12字種(黄・消・人・参・大・風・頭・疔・防・烏・湯・驅)がこれに該当する。

呉音系字音は「広韻」平声・上声・去声に対し、上声去声・平声・平声で現れることが多いため、このグループには必然的に呉音系字音が一定の割合で含まれてくる。またこれらには、去声字が連続すると後接する字は上声で実現するという呉音系字音に特徴的な現象や、語中語尾の去声字は前接する字の声調に関係なく上声で実現するような現象も確認できる。

・黄：33字 32字 (A28・B1・C3) が呉音系字音 広韻平声

「黄連」へ去上 [0125a2]・[0334b6]・[0335b6]・[0342b5]・

[2108a2] 「黄耆」へ去上 [0320a3]・[0330a3]・[0816a3]・

[1232b7] 「黄蘗」へ去入 [1096a8]・[1123b7]・t [1128b2]

「黄芩」へ去上 [0311b4]・[0331b3]・[0341b9] 「黄病」へ去

○ [0111a1] 「干地黄」へ去平上 [0329a6]・[0816a6]・

[1302a3] 「大黄」へ平上 [0342b5]・[1329a2]・[1330b1] 「麻

黄」へ去上 [0311b3]・[0317a1]・[0320a8] 「麻黄湯」へ去上

上 [0108b2] 「牛黄」へ去上 [0132a2]・n [0616a4] 「麝黄」

へ去上 t [0906b9] 「留黄」へ平上 t [0907a3] 「雄黄」

へ去上 [0332a1] 「芩黄」へ平上 [0132a2]

* 「広韻」に一致 「鷄子黄」へ○○平 [0128a4]

・消：22字 全例 (A15・B4・C8) が呉音系字音 広韻平声

「芒消」へ平上 [0127b8]・[0314a6]・[0515a4]・[0608b7]・

[0616a2]・[0620a7]・[0923b3]・[0926a9]・[1034a2]・t [1018a6]・

t [1216b3] 「朴消」へ入上 [1014a7]・[1016a9]・[1020a4]・

[1032b3]・n [1011a6] 「消菴」へ去入 [0212a6]・[2206b1] 「消」

へ去 [0121b8]・[1026a7]・n [0624b3] 「消石」へ去○ [1036a9]

・人：18字 全例 (A15・B2・C1) が呉音系字音 広韻平声

「人参」へ去上 [0310a4]・[0311b3]・[0314a5]・[0329a6]・

[0330a2]・[0338a5]・[0627b1]・[0815a8]・[0816a8]・[1329a3]・

[2023a1]・[2009a4]・n [0627b1]・n [1640a7] 「人溺」へ去上 [0129a2] 「人屎」

へ去上 t [1607b1] 「人中」へ去上 [0113a9] 「桃人」

へ去上 [0314a7]

・参：15字 全例 (A12・B3) が呉音系字音 広韻平声

「人參」〈去上〉[0310a4]・[0311b3]・[0314a5]・[0329a6]・
[0330a2]・[0338a5]・[0627b1]・[0815a8]・[0816a8]・[1329a3]・
[2023a1]・[2009a4]・ \square [0627b1]・ \square [1640a7]「苦參」〈平上〉
 \square [1611b7]

・大…13字 10字(A9・C1)が呉音系字音 広韻去声

「大黃龍湯」〈平〇上上〉 \square [1609a7]「大棗」〈平上〉
[1120a6]・[1126a8]・[1216a4]・[1227b3]・[2220a3]・[2337a2]「
大黃」〈平上〉[0342b5]・[1329a2]・[1330b1]

*「広韻」に一致「大戟」〈去上〉[0129a8]「大素絳」〈去上〇〉
[0104a6]・[0107a9]

・風…13字 12字(A11・C1)が呉音系字音 広韻平声

「防風」〈去上〉[0310a4]・[0311a3]・[0311b3]・[0319a8]・
[0319b8]・[0328b5]・[0339a7]・ \dagger [0143b7]「風市」〈去上〉
[0222a6]・[0822b3]「風門」〈去〇〉[0241b2]「風門熱府」
〈去上上上〉[0219a4]

*「広韻」に一致「風寒」〈平平〉[0107b6]

・頭…12字 11字(A4・B3・C4)が呉音系字音 広韻平声

「烏頭」〈去上〉[0136a8]・[0338b4]・[0706a2]・ \square [1003a5]・
 \square [1005a1]・ \square [1008b3]・ \dagger [0914a7]・ \dagger [2106b8]「頭眩」
〈去平〉[1038a1]・ \dagger [1037b6]「政頭」〈平上〉 \dagger [1613a4]

*「広韻」に一致「白頭翁」〈入平平〉 \dagger [1630a7]

・疸…11字 10字(A5・B3・C2)が呉音系字音 広韻平声

「黄疸」〈〇上〉[1035a6]・[1036a4]・[1038b2]・ \square [1001b2]・
 \dagger [1035b4]・ \dagger [1943b7]「穀疸」〈〇上〉 \square [1001b2]「女勞

疸」〈上平上〉 \square [1001b3]「酒疸」〈〇上〉 \dagger [1035b4]「黑
疸」〈入上〉[1001b3]

*「広韻」に一致「浮疸癰」〈〇平〇〉

・防…11字 9字(A8・C1)が呉音系字音 広韻平声

「防風」〈去上〉[0129a7]・[0310a4]・[0311a3]・[0311b3]・
[0319a8]・[0319b8]・[0328b5]・[0339a7]・ \dagger [0143b7]

*「広韻」に一致「防口」〈平上〉[0310a4]・[0311b3]

・烏…11字 全例(A7・B3・C2)が呉音系字音 広韻平声

「烏頭」〈去上〉[0129a6]・[0136a8]・[0325a6]・[0338b4]・
[0706a2]・[0713a7]・ \dagger [0914a7]・ \dagger [2106b8]・ \square [1003a5]・
 \square [1005a1]・ \square [1008b3]

・湯…10字 全例(A8・C2)が呉音系字音 広韻平声

「湯」〈去〉[0110a4]・[0110b7]・[0123a7]「破棺湯」〈平去
上〉 \dagger [1607b1]「麻黄湯」〈去上上〉[0108b2]「後湯」〈〇
去〉[0121b8]「前湯」〈〇去〉[0121b8]「湯酒膏」〈去上去
[0132b1]「附子湯」〈〇〇去〉[0136b1]「大黃龍湯」〈平〇
上上〉[1609a7]

・嘔…10字 7字(A4・C2)が呉音系字音 広韻平声

「嘔逆」〈上上上〉[1142b5]・[1605a6]・ \dagger [2022b1]「嘔吐」〈上
上〉[2216a1]・ \dagger [2330a4]「嘔逆吐利」〈上上〇〇〉
[1102a2]「渴嘔」〈入上〉 \dagger [2010b7]

*「広韻」に一致「嘔逆」〈平入〉 \square [0617b5]・ \square [0622a3]・ \dagger
[0803b9]

分析対象とした33字種には、呉音系字音を高い割合で含む12字

種が確認できた。これらについてABC筆ごとの内訳を見ると、「黄」「消」「人」「参」「大」「風」「防」「湯」の8字種はA点が多いことが分かる。またC点が多い字種はない。この点、(二)広韻と一致するグループとは異なる傾向を指摘することができる。これは加点者による字音知識の違いを反映したものと推測されるが、詳細は次節で触れる。

なお右に取り上げていないが、「中」(22字中 5字 (A4字・C1字) が呉音系字音)、「数」(18字中 1字 (A1字) が呉音系字音)、「痛」(12字中 1字 (B1字) が呉音系字音)の3字種はわずかながら呉音系字音を含んでいる。

さて、右の字種は本資料全体の中で、どれくらい¹⁵⁾の重みを持っているだろうか。全例の1159字種から漢音系字音との比較のために入声を除いた1112字種中には、275字種(約25%)の呉音系字音が含まれている。同様に、上位頻度33字種から入声字を除くと、24字種中15字種(約68%)に呉音系字音が含まれていることが分かる(本節で検討した12字種に限定しても半数の50%にのぼる)。特に入声を除いた上位頻度の一〜三位までに、呉音系字音が集中していることを考え合わせると、本資料においては高い頻度で声点¹⁶⁾が施されている字に呉音系字音が多く含まれていると言えそうである。

ところで右に検討したグループには、同字でありながら語によって異なる声点が加点されているものがある。例えば「黄」は、「黄連」「黄耆」「黄蘗」などのように本草名の一部をなす場合には去声点が加点され、「鷄子黄」という語で現れる場合は平

声点で加点される。こうした例には12字種のうち7字種が該当する。語によって区別される声点がこのように存在していることは、加点者の加点単位が、語レベルのものであったことを意味している。そこで、本資料に現れる二字漢語の加点状況を調査した。なお、音合符があるもの、連結の結果声調変化を起こしたものの、「人参」「菖蒲」など意味から一語であることが推定できるもの、などを二字漢語と認定した。

漢音系字音と呉音系字音について、部分加点される字と完全加点される字を比較した結果が、次の表である(数字は延字数、「」内は各加点状況ごとの漢音系字音/呉音系字音の%、()内は各字音ごとの部分加点/完全加点の%)。

| | 漢音系字音 | 呉音系字音 | 計 |
|------|-----------------------|-----------------------|-----|
| 部分加点 | 41 (79%) (44%) | 116 (21%) (21%) | |
| 完全加点 | 557 (56%) (56%) | 432 (44%) (79%) | |
| 計 | 998 | 548 | 989 |

呉音系字音のうち、完全加点字の割合は部分加点字よりも高い(79%)。また部分加点字のうち、漢音系字音の割合は呉音系字音よりも高い(79%)。つまり本資料においては、呉音系字音は完全加点が、漢音系字音は部分加点がそれぞれ指向されていた、¹⁷⁾と言え換えられる。

以上、(一)(二)(三)の検討から、声調の異なりに伴う字義の違いを示したり、文の内容や語に応じて音形を決定する場合に、加點頻度が高いことが分かった。

四 吳音系字音加點の目的

前節で得られた結果から、本資料においても先行研究で指摘される加點傾向が確認できたが、吳音系字音に加點頻度が高かったことについてはなお問題が残る。本節ではこの問題を通じて、本資料の加點目的について考えてみたい。

なぜ吳音系字音に加點者の注意が向けられるのだろうか。医書である医心方はある種の専門用語(動物名・本草名・病名・人体の部位名など)を多く含んでいて、それらが吳音系字音語彙であるために、必然的に吳音系字音への加點例が多数となったということが第一に考えられる。しかし資料に吳音系字音語彙が多く含まれることと、それに声點が加點されるかは別である。加點目的に応じて、吳音系字音に加點する必要がある場合とない場合があると考えられるからだ。この問題を考えるにあたっては、医心方という資料がどのように用いられたのかを考え合わせねばなるまい。

平安時代の医書の学習は、延喜式によれば、典葉寮で「太素經」「新修本草」「小品方」「黄帝内經明堂」「八十一難經」等が醫生・針生に講じられていたとされるが、この講説は大学寮で五經と同様に行われていたと考えられており、以後大学寮における博士家のように典葉寮においても家説が成立していったことが明らか

かにされている。⁽¹⁸⁾「半井家本医心方」への移點の原本である宇治本をめぐっては、「玉葉」に藤原兼実が丹波家の人間に医書を講じさせる記述があるという指摘がなされており、⁽¹⁹⁾医書も「他の漢籍と同様に、貴人に対しての個人教授が行われていたであろう」とされる。⁽²⁰⁾「宇治本医心方」が藤原家に所持されていたことを考慮すると、加點された注記は講義の手控えのために記したものと推論してよいだろう。

この推論を検討するために、A B (藤原行盛) 点と C (丹波重基) 点の加點分布の違いを見つめる。次の表は加點者ごとに、一字あたりの加點頻度を示したものである(二字あたりの加點頻度は延べ字数を異なり字数で割った値)。

| 漢音系字音 | A B (藤原行盛) 点 | C (丹波重基) 点 |
|-------|---------------|---------------|
| 吳音系字音 | 2.6 延559 異218 | 2.4 延148 異105 |

C (丹波重基) 点は、漢音系字音と吳音系字音の、一字あたりの加點頻度がほぼ拮抗している。ところが A B (藤原行盛) 点では、吳音系字音に加點頻度が高いことが分かる。この結果は、前節で得られた、広韻一致グループに A B C 点の偏りの共通性が見てとれず、広韻不一致グループに A 点が多く現れていたことと対応する。この二人の加點頻度の差は、手控えに際しての字音知識の差によるものではないだろうか。

丹波重基の加點が医家の家説の中で習得した知識に基づいてな

されたのであれば、医学に関する専門用語の多くが呉音系字音で読まれることを知っていた可能性が考えられる。よってそれらに注意する必要性は低く、加点頻度も低くなる、といったこともあり得ただろう。ただし、A↓B↓Cという加点順序も丹波重基による加点の偏りに関与していると考えられるので、可能性を指摘するにとどめたい。

一方で最初に加点した藤原行盛は、医学に関する専門用語の知識が乏しかったのではないか。医家の人間ではない者にとつて、医学に関する専門用語の字音は見慣れぬものが多かったのだろう。本資料にも多数記載される本草名は、小松英雄一九七一年『前田家本色葉字類抄』の植物門の和訓に加点率が高いことが指摘される。これは実物と名称の引き当てが困難であるためとされているが、本草名を含む医学的な知識がある程度の専門性を帯びていたことを示していると考えられる。このような見慣れぬ用語であるために、藤原行盛は高い頻度で加点したと考えられる。

こうした考えは、A B点が加点された箇所が、場所によつて集中していることから傍証を得ることができる。前節(三)で示した例から挙げると、「湯」は巻一に3回、「黄連」・「黄芩」・「麻黄」は巻三に3回、「芒消」は巻六に3回、「朴消」・「烏頭」は巻十に4回現れる。なかでも「黄疽」は巻十に3回現れるが、巻内でも加点箇所が特に近接しており(1033a6f・1036a4f・10398z2)、「人参」などは巻三に6回で、そのうちいくつかは加点箇所が近接している(0310a4f・0311b3f・0314a5f・0329a6f・0330a2f・0338a5f)。「防風」についての加点箇所の近接はさらに顕著である

(0310a4f・0311b3f・0311b3f・0319a8f・0319b8f・0329b5f・0339a7f)。⁽²²⁾

またこれらには、加点箇所が後のものに部分的な加点をするといった例は一例もない。近接しているにもかかわらず、その都度完全な加点がなされている。こうしたA B点の加点箇所による集中と完全加点の傾向は、藤原行盛が医学に関する専門用語の知識に乏しかったために、手控え、すなわち備忘を目的として加点したと考えなければ、説明しにくい。

五 まとめ

本資料に現れる声点を加点頻度の高いものについて検討した結果、次のことが確認できた。

- ①声調の異なりに伴う字義の違いを示す場合に加点されるものが多い
 - ②一漢字一語であることを示すものに加点されたものが多い
 - ③呉音系字音にもとづくものに加点された頻度が高い
 - ④加点は語レベルの字音知識に基づいている
- ①②は先行研究でも指摘されるものであるが、③は加点された医心方という資料の、医学書としての性格に基づいている。また、加点者ごとの字音知識の質的な差が、加点頻度の差となって現れることが分かった。また、こうした加点者ごとの加点頻度の差から、本資料において加点者は自身の手控え作成を目的として加点を行ったことを考察した。

【参考文献】

秋水一枝一九九一「古今和歌集声点本の研究 研究篇下」(校倉書房)
秋水一枝・坂本清恵・佐藤栄作・加藤大鶴編二〇〇一「医心方声点付和
訓索引」(アクセント史資料研究会)

柏谷嘉弘一九六五「図書寮本文鏡秘府論の字音声点」(国語学61)
加藤大鶴二〇〇〇「半井家本医心方における字音平声軽点認定の二問
題」(早稲田大学大学院文学研究科紀要45 第三分冊)

加藤大鶴二〇〇一a「半井家本医心方における非漢音漢語の声調につい
て」(早稲田大学漢字漢語研究会発表資料)

加藤大鶴二〇〇一b「医心方 字音声点・仮名注索引」(アクセント
史資料研究会)

小助川貞次一九九〇「上野本漢書楊雄伝の声点について」(国語国文研
究86)

小林芳規一九六七「平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究」
(東京大学出版会)

小松英雄一九七一「日本声調史論考」(風間書房)
小松英雄一九七三「国語史学基礎論」(笠間書院)

佐々木勇二〇〇一「唐招提寺蔵「孔雀経音義」院政期点の声調体系―反
切を有する前半部分について―」(国文学攷9)

杉立義一一九九一「医心方の伝来」(思文閣出版)
竹岡友三一九九三「医家人名辞書」(似玉堂)

築島 裕一九九四「半井本医心方の訓点について」(「醫心方の研究」オ
リエント出版)

當山日出夫一九八三「神田本白氏文集声点考」(訓点語と訓点資料69)
西崎 亨一九九五「半井家本「医心方」所引「玉篇」覚書き」(武庫川
国文45)

沼本克明一九八二「平安鎌倉時代に於ける日本漢字音に就ての研究」(武
蔵野書院)

沼本克明一九九七「日本漢字音の歴史的研究―体系と表記をめぐって」

(波古書院)

服部敏良一九五五「平安時代医学の研究」(桑名文星堂)
松本光隆一九七九「書院部蔵医心方の訓方―助字の訓方を中心とし
て―」(鎌倉時代語研究2)

松本光隆一九八〇「平安鎌倉時代における医書の訓読について」(国文
学攷87)

注(1) 小松英雄一九七一(第一部第一章)・小松英雄一九七三(第一部
第一章・第四章)ほか。

(2) 當山日出夫一九八三。
(3) 秋水一枝一九九一(第二部十二)。

(4) 第一、二、三、二四、二六、二七、三〇巻
加藤大鶴二〇〇一b凡例参照。

(5) 加藤大鶴二〇〇〇。本資料には和語に星点による声点があり、こ
ちらも六声体系である。和語については秋水一枝・坂本清恵・佐藤
栄作編二〇〇一の索引がある。

(6) 杉立義一一九九一(第七章第二節)。
(7) 松本光隆一九七九、築島裕一九九四。

(8) 藤原広業―家経―行家―行盛(尊卑分脈)。小林芳規一九六七
によれば広業は藤原内膳流の日野家の訓説を持つという。

(9) 丹波重基「重康ノ第二子権医博士・権侍医・典薬頭・施薬院使・
兼丹波権守・主税頭・女宮別当・著作権介等ヲ歴官ス大治五年関白
忠通薨ヲ病ム大サ柑子ノ如シ痛骨節ニ徹シテ軛倒スル能ハス重基之
ニ灸スルコト三十七壯痛頓ニ減ス次日膿潰シテ愈ユ又鳥羽帝及崇徳
院ノ弗子ヲ治シテ効ヲ奏ス」(竹岡友三一九九三)

(10) 沼本克明一九八二(第二部第一章)・一九九七(第三章第二節)、
小助川貞次一九九〇ほか。本資料に見れる反切の典拠については、
西崎亨一九九五に玉篇をはじめとした多くの字書・音義書の利用の
指摘がある。

(12) 「雍(へ平)左 n 普江反頭莫江反(2034)止」の一例のみが、例外となる。が、この例は義注も含めて長い注であり、長さも三字下の被注字にまで及ぶ。その字の右傍にはすでに墨筆の和訓があり、これを避けるために左傍としたものと考えられる。

(13) 柏谷嘉弘一九六五・沼本克明一九八二(第二部第五章)他によれば、日本漢音には、母胎音である秦音(唐代末期長安音)に生じた全濁上声の去声化が反映する。切韻系韻書は中古音に基づいているため、この変化は反映していないとされる。

(14) 佐々木勇二〇〇一では、唐招提寺蔵「孔雀經音義」において、全濁上声の去声化を反映する掲出字声点と、反映しない反切声調とのずれが指摘されている。

(15) 加藤大鶴二〇〇一aにて報告した。

(16) この結論から、(広韻と比較ができない)入声字を、入声字を含む語レベルで検討すると、例えば「石」・「朴」などは呉音系字音と

みなすことができる。なおこれらのいくつかに付されている仮名音注も呉音系字音にもとづいている。

「慈石」へ去入(2129b)、「石南草」へ入去(シヤクナムサウ)へ(2320a31)、「石留皮」へ入上〇(*ロ*)へ(2229a9)、「樊石」へ去入(ホンシヤク)へ(2343a6)

「朴消」へ入上(1014a7)

(17) 服部敏良一九五五(第三章)。

(18) 松本光隆一九八〇。

(19) 杉立義一九九一(Ⅱ第二章第四節)。

(20) 注18文献。

(21) 築島裕一九九四によれば藤原忠実、松本光隆一九八〇によれば藤原頼長という。

(22) 卷三、六、十に加点が集中していることは、どの巻がより講義に使用されたのか、ということも関連があらう。今後の課題としたい。

新刊紹介

細川英雄著

『日本語教育は何をめざすか』

『言語文化活動の理論と実践』

本書は第二言語としての日本語教育における考え方とその方法論の問題について、ことばと文化における教育の統合的課題という視点から捉え、これを理論的な立場か

ら総合的に考察するものである。言語と文化はどのようにかかわるのか、また、この二つはどのように学ばれるべきなのか、という言語習得について論じ、第二言語としての日本語教育は何をめざすのかという理論的課題について見解を述べている。

本書全体は、第二言語としての日本語習得の問題を学習者の視点に立って考察する言語学習論であり、同時にそうした学習者の言語習得をどのようにして支援すること

ができるか、またその環境はどのような原理、どのような方法のもとで成り立ち得るのか、という言語教育論でもある。

言語文化学習活動への新しい視座を構築しようとする試みとして注目すべき一冊である。

(二〇〇二・一 明石書店 A5判 三四頁 六五〇〇円) (田中優子)